

日本西アジア考古学会設立 20 周年特別企画に関する報告

桑原 久男・河合 望・安倍 雅史

JSWAA 20th Anniversary Special Events

Hisao KUWABARA, Nozomu KAWAI and Masashi ABE

1. はじめに

2017 年、日本西アジア考古学会は、学会設立 20 周年という記念すべき年を迎えた。今年度、この 20 周年を祝う特別企画として、1. 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念セッション「モニュメントと古代社会」の開催、2. 『季刊考古学』141 号・特集「西アジア考古学・最新研究の動向」の出版、3. 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念パーティーの開催、という三つの事業を行なった。本稿では、これらの特別企画に関して報告したい。

2. 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念セッション「モニュメントと古代社会」

2017 年 7 月 1 日、天理大学袖之内キャンパスにて開催された日本西アジア考古学会第 22 回大会において、学会設立 20 周年を記念したセッション「モニュメントと古代社会」が企画された。エジプトのピラミッドやメソポタミアの神殿やジググラト、日本の古墳などについて、5 名の研究者が最新の知見や研究を踏まえた報告を行った(図 1)。

常木晃会長(筑波大学教授)は趣旨説明において、農耕牧畜の開始、冶金術の発達、都市の形成、文字の発明、国家の形成、一神教の出現など、人類史を大きく進展させた重要な変革が古代西アジアで達成され、それらが中世、近代、そして現代社会にまで受け継がれて現代文明の根幹を成したという考え方が、進歩史観の中で語られてきたが、近年はその見直しが迫られていることを述べた。

壮麗な宮殿や階段から見上げる壮大なジググラトといった築造におびたしい労働力と資源の動員が必要な巨大モニュメントもまた、これまで、進歩史観的なコンテキストの中で理解され、とくに、背後の支配権力との関係が問われることが多かった。「古代日本の古墳築造と社会関係」と題した福永伸哉氏(大阪大学教授)の報告は、まさにこうした視点に立つもので、①社会関係、②経済力、③軍事力、④イデオロギーの四つが首長の権力源とする人類学者 T. アール(Earle)の学説を紹介しながら、古墳を含むモニュメントの利用は、「イデオロギー」の具現化(公的儀礼行為、象徴的器物、記念物のある景観等)をはかる首長の戦略として理解できるとした。

一方、この 20 年間で、これまでの進歩史観的な解釈を根底から覆すような様々な発見が相次ぎ、同時にモニュメントに対する理解の仕方にも変化が生じている。「西アジア新石器時代のモニュメントと社会」と題した三宅裕氏(筑波大学教授)の報告では、トルコ南東部のギョベクリ・テペ(Göbekli Tepe)遺跡やネヴァル・チョリ(Nevali Çori)遺跡など、農耕社会以前の狩猟採集社会にも多様な動物や人間を彫刻した石柱を林立させた巡礼地やベンチをめぐらせた大円形施設が存在したことが紹介された。すなわち、モニュメントの建造は、必ずしも社会内の階層性や強大な政治権力の存在が前提ではなく、農業生産の発達をはじめ、特定の生業戦略とも結びつかないことが明らかになってきたのである。

また、馬場匡浩氏(早稲田大学准教授)の報告によれば、古代エジプトのピラミッドは、官僚組織が成熟した古王国時代前半に絶頂期を迎えるものの、そもそも、ピラミッド複合体とは、創造主たるファラオが儀礼を通して再生復活して世界を安定させる装置であり、古代エジプトのコスモロジーが具現化したものなのだという。王の権威強化の効果は、あったとしても二次的なもので、ピラミッドには世俗的な目的はなく、政治的な性格も希薄だと馬場氏は述べる。巨大なモニュメントを創造する背景やその意味は、社会経済的な進歩史観の中では捉えきれず、信仰や象徴性など、人間活動の多様な精神活動に目を向けて初めて



図 1 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念セッション「モニュメントと古代社会」の様子

その理解が深まるということが認識されるようになってきたのである。

「シリア青銅器時代のモニュメント—記憶・社会・権力—」と題した下釜和也氏（古代オリエント博物館研究員）の報告では、モニュメントに対する考古学的な理解の仕方が変化してきたことに触れながら、シリア青銅器時代のテル・バナート（Tell Banat）遺跡の事例が紹介された。「白のモニュメント」と呼ばれる円錐状の独立丘が、過去の丘に土砂を盛りながら、約300～400年間にわたって増改築を繰り返し、死者の埋骨を行き続けた形跡が認められたことについて、短期間のうちにモニュメントを築造して、権力者の意思を具現化した物的構造物を永久に残すというよりは、儀礼行為、特に埋葬儀礼を継続し、モニュメントを建造し続けることに意味があったとする。

岡田保良氏（国士舘大学教授）の報告、「西アジア古代都市のモニュメント」では、ウバイド前期文化（前6千年紀末頃）以降、数千年の長きにわたって日乾煉瓦造りの神殿が同じ場所に継続して営まれたことが紹介された。初期の凸字形平面の原初的な祠堂の段階で、すでに、アルコーヴ状の内陣、祭壇、供物台など、神殿に固有の建築要素が認められ、のちに、三列構成の内部空間を持つ大建築に発展し、エリドゥ（Eridu）遺跡第Ⅶ層（前4千年紀初頭）の建物では、神の座を中央広場妻側のアルコーヴに置き、主たる入り口を長辺側において内陣への導線を曲がり軸とする神殿形式が定着するという。

今回のセッションでは、特定の個人や出来事を「思い起こし」「記念する」というのがモニュメントの原義で、モニュメントの特徴として、巨大性、恒久性、記憶の3点が重要だということも改めて確認された。

当日の参加者は、会員が54名、非会員が48名と盛況であったが、セッションの終了後、参加者の多くは、まだ高い夏の日差しの中、会場を出発し、まさにモニュメントと言って差し支えない天理教の神殿の前を歩き、その造営にあたって、多くの信者がモッコを担いで「土持ひのきしん」を行なったという説明を受けながら、こちらも、現代のモニュメントと言えるだろうか、天理駅前に古墳をモチーフに新しく整備された「コフン」の一つ、「インフォ&ラウンジコフン」内の懇親会場へと向かったのがあった。

3. 『季刊考古学』141号・特集「西アジア考古学・最新研究の動向」

2017年11月1日、日本西アジア考古学会設立20周年を祝う特別企画として、雄山閣から『季刊考古学』141号・特集「西アジア考古学・最新研究の動向」（編集：常木晃会長・西秋良宏副会長・山内和也副会長）が出版され

た（図2）。この場を借り、出版の企画をご快諾いただき、編集にご尽力くださった雄山閣の桑門智亜紀氏に感謝を申し上げたい。

『季刊考古学』で西アジア考古学の特集が組まれたのは実に20年ぶりである。学会が設立された1997年に、櫻井清彦初代会長と松本健元会長が編者をつとめ、『季刊考古学』61号・特集「日本・オリエント＝シルクロード—古代オリエントを掘る—」が出版されている。

当時の執筆陣を見ると、櫻井清彦初代会長をはじめ、松本健元会長、杉山二郎氏、大橋一章氏、谷一尚氏、岡内三眞氏、堀咲氏、加藤九祐氏、吉村作治氏、西秋良宏氏、脇田重雄氏、和田久彦氏、佐々木達夫氏、藤井秀夫氏と錚々たる顔ぶれが並んでいる。この特集号では、日本隊による西アジア考古学調査の歴史が紹介され、テル・マストゥーマ（Tell Mastuma）やテル・コサク・シャマリ（Tell Kosak Shamali）の発掘調査、早稲田大学によるエジプト調査の諸成果などが報告されている。

それから20年、この記念すべき年に、再び西アジア考古学特集号が『季刊考古学』から出版されたことは、大変喜ばしいことである。この間、日本隊による西アジア考古学調査は飛躍的に発展を遂げた。現在では、西アジア、中央アジアの15カ国以上において、25隊以上もの調査団が活動を行っている。また、日本隊が手掛ける調査対象も、旧石器時代からイスラーム、近世まで幅広いものとなっている。過去20年、確実に日本隊は世界の中でその存在感を増している。

今回の特集号には、ベテランから若手まで、学会を代表する22名の研究者が論考を寄稿した。人類史の画期に焦点をあて、「西アジア考古学から見た人類の進化と拡散」、「西アジア新石器時代の社会」、「西アジアの都市と国家の形成」というテーマを設けている。



図2 『季刊考古学』141号・特集「西アジア考古学・最新研究の動向」の表紙

「西アジア考古学から見た人類の進化と拡散」では、西秋良宏副会長と門脇誠二氏、野口淳氏が、現生人類到来以前の西アジア、また現生人類による出アフリカと北廻り・南廻りルートによるユーラシア大陸への拡散に関して、最新の研究成果を紹介している。日本の旧石器時代研究者からも注目を集める内容となっている。

「西アジア新石器時代の社会」では、まず三宅裕氏がトルコのギョベクリ・テペ遺跡の発掘調査成果を紹介し、食糧生産経済の成立が社会の複雑化をもたらしたとする従来の定説に一石を投じている。本郷一美氏と丹野研一氏は、西アジアにおける家畜化と栽培化に関する最新の研究成果を報告し、前田修氏は、新石器時代に交易ネットワークが拡大・強化されたその社会的な意味を論じている。

「西アジアの都市と国家の形成」では、小泉龍人氏が、2017年の春に自ら実施した南メソポタミアを代表する都市遺跡であるウルク (Uruk)、ウル (Ur)、エリドゥの実地調査を報告し、貴重な論考となっている。また紺谷亮一氏と中野智章氏は、それぞれアナトリアの都市形成とエジプトの国家形成に関して論じている。

また、この特集号では、上記の3テーマ以外に、一般読者に人気が高い「聖書考古学」と「エジプト考古学」もテーマとして採り上げている。

「聖書考古学の諸問題」では、長谷川修一氏と宮崎修二氏が、聖書と考古学の関係性を議論し、これからの聖書考古学のあるべき姿を模索している。津本英利氏と小野塚拓造氏は古代イスラエル人の出現問題に関する最新の研究動向を紹介し、桑原久男氏と橋本英将氏は、日本隊が調査してきたエン・ゲヴ (En Gev) とテル・レヘシュ (Tel Rekhesh) をめぐる諸問題を紹介している。

「エジプト考古学の現在」では、高宮いづみ氏が先王朝時代に関する最新の研究動向をまとめ、近藤二郎氏と河合望氏はそれぞれネクロポリス・テーベ (The Theban Necropolis) とメンフィス・ネクロポリス (Memphis Necropolis) に関する最新の研究成果を紹介している。

近年、紛争下における文化遺産の破壊が日本でも大きく報道されている。そのため本特集号でも「紛争と文化遺産」を特別テーマに掲げ、西藤清秀前会長がシリア・パルミラ (Palmyra) 遺跡をめぐる動向を、山内和也副会長がアフガニスタン・バーミヤーン (Bāmiyān) 大仏の破壊に至るまでの経緯をまとめている。

また、藤井純夫元会長、沼本宏俊氏、大村幸弘氏にも、ヨルダン・ジャフル盆地、テル・タバン (Tell Taban)、カマン・カレホユック (Kaman-Kalehöyük) の発掘調査に関して、コラムの執筆を依頼した。

本特集号は、西アジア考古学を研究する専門家のみならず、日本考古学を学ぶ研究者や一般読者にとっても読みやすい内容となっている。まだ本書を手にしていない会員がおられたら、ぜひお買い求めいただきたい。

なお、本特集号は出版後、Amazon.co.jp の考古学部門で売上ランキング1位になるなど、売れ行きは順調である。

4. 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念パーティー

2017年11月18日、早稲田大学戸山キャンパスにおいて学会主催シンポジウム「最新科学による西アジア文化遺産の調査と保護」が行なわれた。シンポジウム終了後、場所を戸山キャンパス内のカフェテリアに移し、学会設立20周年を祝う記念パーティーが開催された (図3)。

パーティーは好評で、47名もの学会員やシンポジウム



図3 日本西アジア考古学会設立 20 周年記念パーティーの集合写真

参加者が集った。席上では、松本健元会長や脇田重雄元副会長が、日本西アジア考古学会の設立の経緯や設立の趣旨、また当時の学会の様子などを語られた。学会設立から20年経ち、学会設立の経緯を知らない中堅研究者や若手研究者が増えるなか、両氏の思い出話は極めて貴重であった。

また、記念パーティーの参加者には、今回のために特別に製作された日本西アジア考古学会20周年記念オリジナル野帳が配布された。まだ、残冊があり、発掘調査報告会や講演会の場において販売される予定なので、ぜひお買い求めいただきたい。

5. おわりに

2017年、日本西アジア考古学会は設立20周年を迎えた。ようやく成人式を迎えた学会であるが、これまでに歩んできた道のりは順風満帆であったと言って差し支えないだろう。しかし、その陰には、歴代の会長や役員の方々また会員の皆様方の多大なるご努力があったと思われる。この場を借り、改めて感謝を申し上げたい。

桑原 久男

天理大学文学部

Hisao KUWABARA

Faculty of Letters, Tenri University

河合 望

金沢大学新学術創成研究機構

Nozomu KAWAI

Institute for Frontier Science Initiative,

Kanazawa University

安倍 雅史

東京文化財研究所

Masashi ABE

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties